



有形文化財（絵画）

9. 絹本着色十三仏画像 けんぼんちやくしよくじゅうさんぶつが ぞう 3幅 ぶく

■指定年月日 昭和44年2月6日(1969)

■寸法 縦88.5cm 横37.6cm

■所在地 三崎町粟津2-23

■所有者 きんこういん 琴江院

十三仏とは、初7日から33回忌までの13回の法要に際して、それぞれの忌日の本尊とされる諸仏で、釈迦如来・文殊菩薩・普賢菩薩・不動明王・地蔵菩薩・弥勒菩薩・薬師如来・観音菩薩・勢至菩薩・阿弥陀如来・阿閼如来・大日如来・虚空蔵菩薩をいう。十三仏を1幅にしたものをはじめ、様々な画像が知られているが、琴江院のものは、3幅仕立てである点、中尊を坐像にした点、飛雲に乗る十三仏として描かれている点など、類例の少ない特色ある仏画である。

中尊軸には飛雲上に、蓮華座の釈迦如来坐像、下方、向かって右に獅子に乗った文殊菩薩、左に象に乗った普賢菩薩を三尊形式で描く。左右の軸には、

如来・菩薩・明王の五尊ずつを飛雲上の立像で描く。飛雲は早來迎を表す。末法の世にあって、人々の早く浄土に迎えられたい、との願いに添うように描かれたものである。描法の正確さ、保存状況のよさなど、能登を代表する十三仏画である。

室町時代初期に、中央の本格的絵師によって描かれたといわれているが、絵師名は不明。正中2年(1325)、京都・東福寺末として、当寺が開かれた当時以来の寺宝と伝承されている。